８　「浜松中納言物語」 ─中古の作り物語

19年度　西南学院大学

★　次の文章は『浜松中納言物語』の一節である。中納言は、母の尼君と吉野で暮らす姫君に対して好意を抱くが、尼君の病死により、頼るもののなくなった姫君のために、世話役を招くことを思い立つ。これを読んで、後の問いに答えよ。

　雪はいとど日を経て積りゆくに、御も　 ａ 　果てつ方になりゆくに、さてのみえ絶え籠もり１給ふまじければ、「京に出で①なむ」とアおぼすに、「この姫君をいかでか見捨てむ。はかばかしく、いささかイものおぼえたる人もなかめり。いみじきこころざし思ふとも、雪降り積もりたる山道を、さのみ立ち帰り、え渡るまじう、分け歩かじを、親の御かげにてのみこそは、おのづから過ごし２給ひけめ、今は片時も、　 ｂ 　跡とめ給はじと、我もいみじう見捨てがたきに、引き続きて出でむもあしかるべし。おはしどころなど、さるべきやうにてこそ迎へに来め」とおぼすにも、いとうしろめたうウおぼつかなきに、３おぼしわづらひて、預かりたる中将のエ乳母のと②の、の国ののてありけるが、国のことどもなどもし乱れて、つゆの残りもなく、わろびたる世をありわづらひて、さるべくもしかるべきよすが求めて、かきうつろひ、１なく忘れにたるを、思ひ嘆き、いかならむぬ山路もがなと、泣く泣く十七八ばかりなる娘オの、いと２をかしげなるを身に添へて、かの中将の乳母のかげに隠れて過ぐるを、「カ心ばへと言ひ、預けたらむに、人おろかなる思ひなどすべくもあらず、あはれなるべき人々を」とおぼし出でて、「キあやしうおぼすべけれど、詳しき有様はみづから４聞こえむ。　 ｃ 　若き人具しておはせよ。３うしろめたきことは、クよに聞こえじ」と、かへすがへす書き給ひて、迎へにつかはしたれば、「あやしう、　 ｄ 　いかなることならむ」と思へど、姉のゆかり、この君の御かげを、頼もしきことに思ふ身なれば、いなぶべき方なきに、中将の乳母も、「あしきさまに、見苦しからむこと５仰せられむやは。さらばただとく６参り７給へ」と言ふ。

注１　若君……中納言の子。中将の乳母に預けている。

注２　おとと……妹

注３　具……妻

注４　頼もしかるべきよすが……頼りになる女

注５　見えぬ山路……ひどい目にあったときに逃げ込む避難路

問１　傍線イ・ウ・カ・キの意味として最も適当なものを下記の１―４の中からそれぞれ一つ選べ。

　　イ「ものおぼえたる人」

　　　１　記憶力のある人　　２　道理のわかる人

　　　３　自信のある人　　　４　人気のある人

　　ウ「おぼつかなき」

　　　１　待ち遠しい　　　　２　疑わしい

　　　３　決めがたい　　　　４　不安である

　　カ「心ばへ」

　　　１　気立て　　２　風情　　３　趣意　　４　意向

　　キ「あやしう」

　　　１　卑しく　　２　珍しく　　３　不安に　　４　奇妙に

問２　傍線ア「おぼす」の内容として最も適当なものを次の１―４の中から一つ選べ。

　　１　中納言が、姫君に京に出てほしいと思ったこと。

　　２　姫君が、中納言に京に出てほしいと思ったこと。

　　３　中納言自身が、京に出ようと思ったこと。

　　４　姫君が、きっと中納言が京に出るだろうと思ったこと。

問３　□ａ―ｄに最も適当な言葉を次の１―６の中からそれぞれ一つ選び、その番号を記入せよ。同じ言葉を二度使ってはならない。

　　１　にはかに　　２　そこら　　　３　かならず

　　４　よも　　　　５　すなはち　　６　やうやう

　　ａ＝〔　　　〕　　ｂ＝〔　　　〕　　ｃ＝〔　　　〕　　ｄ＝〔　　　〕

問４　傍線オと同じ用法の「の」を次の１―４の中から一つ選べ。

　　１　この歌は、ある人、近江のとなむ申す。

　　２　昼も人や見むの疑ひなし。

　　３　日暮るるほど、例の集まりぬ。

　　４　かしこき人の富めるはまれなり。

◎問５　本文の内容に合致するものを次の１―４の中から一つ選べ。

１　中納言は、これまで親ののもとに過ごしていた姫君が、今となっては吉野に残るつもりはないだろうと考えていた。

２　中将の乳母の妹は、頼りになる女を求めた夫を見限り、美しい娘を連れて中将の乳母の許に身を寄せていた。

３　中納言は、事の詳細は自然と耳に入るので、娘を連れてきてほしいと中将の乳母の妹に手紙を送った。

４　中将の乳母は、中納言が何か悪いことを言うかもしれないと言って、娘を連れて吉野に行くことに反対した。

問６　『浜松中納言物語』は、平安時代後期に成立した作り物語の一つである。作り物語ではない作品を次の１―５の中から一つ選べ。

　　１　落窪物語　　　　２　狭衣物語　　　３　栄花物語

　　４　堤中納言物語　　５　宇津保物語

問７　傍線ク「よに聞こえじ」を現代語に訳して記入せよ（十五字以内）。

　　［

］

問８　傍線エの読み方をひらがな（現代かなづかい）で記入せよ。

　　［　　　　　　　　　　］

【確認問題】

１　二重傍線部①「なむ」・②「の」について、同じ働きをしているものをそれぞれ次から選べ。

　①「なむ」

　　ア　身は賤しながら、母なむ宮なりける。

　　イ　親王、酔ひて入り給ひなむとす。

　　ウ　外山の霞立たずもあらなむ

　　エ　死なむと思ふにも死なれず。

　②「の」

　　ア　犬のことごとしくとがむれば、

　　イ　人の国にかかる習ひあなり。

　　ウ　荒れたる宿の人目なきに、籠りゐたり。

　　エ　大納言のはめでたく、兼久がはわろし

２　傍線部１～７の敬語の種類と、敬意の対象を、次のⅠ・Ⅱの語群からそれぞれ選べ。

　Ⅰ　敬語の種類

　　ア　尊敬語　 イ　謙譲語　 ウ　丁寧語

　Ⅱ　敬意の対象

　　ア　中納言　　　　イ　姫君

　　ウ　中将の乳母　　エ　乳母の妹

　１　Ⅰ〔　　　〕　Ⅱ〔　　　〕

　２　Ⅰ〔　　　〕　Ⅱ〔　　　〕

　３　Ⅰ〔　　　〕　Ⅱ〔　　　〕

　４　Ⅰ〔　　　〕　Ⅱ〔　　　〕

　５　Ⅰ〔　　　〕　Ⅱ〔　　　〕

　６　Ⅰ〔　　　〕　Ⅱ〔　　　〕

　７　Ⅰ〔　　　〕　Ⅱ〔　　　〕

３　波線部２・３の本文中の意味として適当なものをそれぞれ次から選べ。

　２　をかしげなる

　　ア　みすぼらしい　　イ　おとなしい

　　ウ　かわいらしい　　エ　器量の悪い

　３　うしろめたき

　　ア　後悔するような

　　イ　不安で気がかりな

　　ウ　心配で恐ろしい

　　エ　聞くと気分の悪い

【補充問題】

４　波線部１「名残なく忘れにたる」の意味として適当なものを次から選べ。

　ア　妻が夫から、仕方なく離れてしまった

　イ　夫が妻を、泣く泣く見捨ててしまった

　ウ　娘が父を、未練もなく忘れてしまった

　エ　夫が妻を、未練もなく捨ててしまった

【解答】

問１　イ＝２　ウ＝４　カ＝１　キ＝４

問２　３

問３　ａ＝６　ｂ＝４　ｃ＝３　ｄ＝１

問４　４

問５　１

問６　３

問７　決して申し上げないつもりだ（13字）

問８　めのと

【確認問題】

１　①＝イ　②＝ウ

２　１　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝ア

２　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝イ

３　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝ア

４　Ⅰ＝イ　Ⅱ＝エ

５　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝ア

６　Ⅰ＝イ　Ⅱ＝ア

７　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝エ

３　２＝ウ　３＝イ

【補充問題】

４　エ

【現代語訳】

　雪はますます日を追って積もっていく上に、御服喪（の期間）もしだいに終わりの頃になっていくので、（中納言は）そのように（都と消息を）絶って籠もりなさってばかりはいられないので、「（すぐにも）都に出よう」とお思いになるが、「この姫君をどうして見捨てることができるだろうか、いやできるはずがない。しっかりした、少しでも道理のわかっている人（＝女房）もいないようだ。（私が姫君に）たとえたいへん強い好意を抱いているとしても、雪が降り積もっている山道を、そうむやみに立ち戻り、通うことができそうもなく、（雪を）分けて歩くこともできないだろうから、（姫君は今まで）親の御庇護によって、不自由なくお暮らしになっていたのだろうが、今は一時も、まさかここにお残りにならないだろうと（思われ）、私も（姫君を）到底見捨てられないが、（かといって、我々二人が）続けざまに（都へ）出るとしたら具合が悪いだろう。（姫君が都で）お暮らしになる所などを、ふさわしいように整えてから迎えに来よう」と思いなさるにつけても、たいそう気がかりで不安であるので、思案にくれなさって、若君を預かっている中将の乳母の妹で、上野国の守の妻であった者が、（夫の上野守は）国の政のあれこれなども乱脈にして、まったくどうしようもないほど、悪くなってしまった世の中に居づらくなって、身を寄せるのにふさわしい（土地の有力者の娘で）頼りになる女を探して、移り住み、（妻であった乳母の妹を）未練もなく忘れてしまったので、（乳母の妹は）思い嘆いて、たとえどのようなところでもひどい目にあったときに逃げ込む避難路が欲しいと（思って）、泣きながら、十七、八歳ほどの娘で、とてもかわいらしい娘をひき連れて、あの中将の乳母の庇護のもとで暮らしているのだが、「気立て（の良さ）といい、もし預けたとしても、（傷心の姫君を）なおざりに思うなどするはずもなく、情が深いにちがいない母娘であるよ」と（中納言は）思い出しなさって、「奇妙に思いなさるだろうが、詳しい事情は（会ってから）自分で申し上げよう。必ず若い人（＝娘）を連れておいでください。（あなたが聞いて）不安になることは、決して申し上げないつもりだ」と、（手紙に）繰り返してお書きになって、迎えに（家来を）派遣なさったので、（乳母の妹は）「奇妙で、唐突にどのようなことなのだろうか」と思うが、（自分が身を寄せている）姉の縁者であり、この中納言の御庇護を、頼もしいことだと思う身であるので、断ることができる道理はない上に、中将の乳母も、「不都合で、見るに忍びないようなことを（中納言が）おっしゃるだろうか、いやおっしゃるはずがない。それならばただ急いで参上なさい」と言う。